

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ

イズミノオト 第9回 シューマン 詩人ノ恋

バリトン

早坂 卓

ピアノ

倉戸 テル

チェロ・コールドイネーター

吉岡 知広

ピアノ

三原 未紗子

ヴァイオラ

瀧本 麻衣子

ヴァイオリン

三原 久遠

ヴァイオリン

山田 香子

2024

7 / 7 (日)

〔開演〕午後3時(開場午後2時30分)

〔会場〕仙台銀行ホール イズミティ21 小ホール
(仙台市営地下鉄泉中央駅北3出口よりすぐ)

〔入場料〕全席指定 3,000円

(市民文化事業団友の会料金 2,700円)

※未就学児はご入場いただけません

2024年5月1日(水)一般発売

Robert Alexander Schumann

〔ブレイガイド〕仙台銀行ホール イズミティ21、日立システムズホール仙台、藤崎、ローソンチケット(Lコード:25501)

〔チケットに関するお問い合わせ〕仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875(平日9:30～17:00)

〔公演に関するお問い合わせ〕仙台銀行ホール イズミティ21 TEL:022-375-3101(9:30～19:30 休館日を除く)

〔主催〕公益財団法人仙台市市民文化事業団、kbb東日本放送 〔企画制作〕仙台銀行ホール イズミティ21、HAL PLANNING

〔後援〕公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団 〔協賛〕仙台銀行、宝来産業

「プログラム」

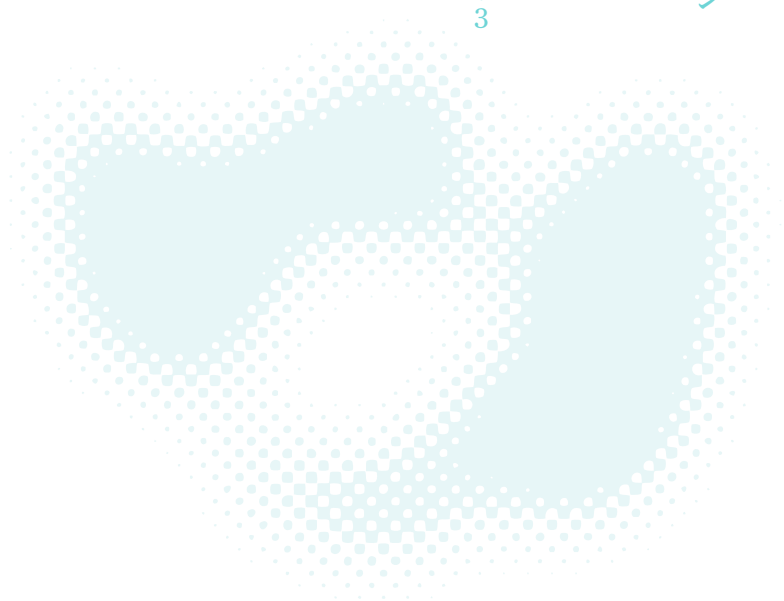
ロベルト・アレクサンダー・シューマン

子供の情景 作品15

詩人の恋 作品48

弦楽四重奏曲 第3番 イ長調 作品41-3

天使の主題による変奏曲



Facebook情報

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ

コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね!”してください。

URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>



仙台銀行



仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通して、地域の文化活動を支援しています。

吉岡 知広 チェロ・コーディネーター

仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科(共学)を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後、ライブツィヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともに、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍。卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ビバホールチェロコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C・ギガーの各氏に、室内楽を今井信子氏、東京カルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。



©Masafumi Tamura



©Masafumi Tamura

早坂 卓 バリトン

宮城県出身。鹿児島国際大学音楽学科卒業。オラトリオではJ.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」G.F.ヘンデル作曲「メサイア」などでソリストを務める。オペラではW.A.モーツァルト作曲オペラ「ドン・ジョヴァンニ」にてドン・ジョヴァンニ役で出演。歌曲ではF.シューベルト作曲「冬の旅」全曲リサイタルを開催。現在オーストリア、グラーツ国立音楽大学に在籍。



©Masafumi Tamura

倉戸 テル ピアノ

大阪府生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校、同大学を経て、東京藝術大学修士課程を修了後渡米、ジュリアード音楽院大学院卒業。ソロの活動としてオーケストラとの共演や、多数のリサイタルを開催し、室内楽の分野では数多くの演奏家と共演し絶大な信頼を得ている。特に1996年からのチェロ奏者藤原真理との共演回数は250回を超えている。宮城教育大学教授。



©Karin Shikata

三原 未紗子 ピアノ

第26回ブラームス国際コンクール優勝。第5回アルコバッサ国際室内楽コンクール最高位。ソロや室内楽での出演、ソリストとして日本センチュリー響等と共演し活躍の幅を広げている。桐朋学園大学を経てベルリン芸術大学を最高位卒業、モーツァルトウム大学院を首席卒業。J.ルヴィエ、Z.チョチエヴァの各氏に師事。令和元年度藤沢市生涯学習特別貢献賞受賞。桐朋学園大学非常勤講師。



山田 香子 ヴァイオリン

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学を経て、同大学大学院修士課程を首席で卒業、大学院アカンサス音楽賞を受賞。現在、タレイア・カルテット第1ヴァイオリン奏者。宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位、大阪国際室内楽コンクール2023にてボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞受賞。室内楽やソロを始めオーケストラの客演演奏、後進の指導等幅広く活動している。



©井村重八

三原 久遠 ヴァイオリン

桐朋学園大学音楽学部を経て、スイス・バーゼル音楽院修了。ウェールズ弦楽四重奏団のメンバーとして、第7回大阪国際室内楽コンクール第3位、バーゼル・オーケストラ協会コンクール"ex aequo"賞を受賞。ミッシェル・マイスキー、メナヘム・プレスラー、リチャード・ストルツマン、ポール・メイエらと共演。東京都交響楽団 第2ヴァイオリン副首席奏者。



©Yoshinori Kurosawa

瀧本 麻衣子 ヴィオラ

東京藝術大学において、菅沼準二、川本嘉子の各氏に師事。卒業後はシュトゥットガルト音楽大学院にてアンドラ・ダーツィンスに師事。第10回東京音楽コンクール弦楽器部門第3位。ウィーン国立音大室内楽アカデミーにてArtis-Preis受賞(第1位)。サイトウキネンオーケストラ、水戸室内管弦楽団に参加。現在、新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者。

シューマンと

「ダヴィッド同盟」の思想

―飽くなき独創性の追求

文・西原稔（音楽学者、桐朋学園大学特別招聘教授）



シューマン（画：アドルフ・フォン・メンツェル）

シューマンの作品は同時代のリストやショパンとは異なります。

彼はドイツ文学を重要な創作の源とし、自身の音楽創作のなかに様々な形で文学の要素を織り込みました。

また彼はとくにバッハやベートーヴェンの伝統を重んじつつ、伝統に縛られない新しい芸術を開拓しました。

音楽評論活動も彼の重要な側面です。

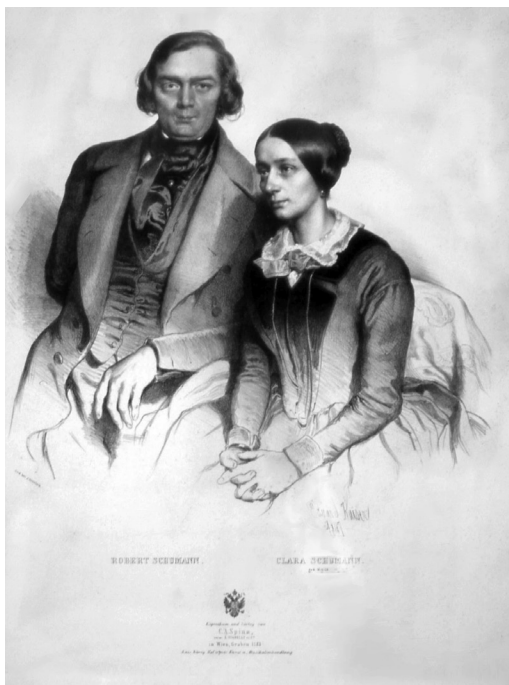
芸術の本質を追求する団体としてダヴィッド同盟という架空の団体を作りました。

彼は独創的であることを終生、追求しました。

「ダヴィッド同盟」の思想

シューマンは自身の音楽批評において、ロマン派の多くの作曲家が古典的なピアノソナタをデビュー作品とし、それに「作品1」という番号を与えていることを批判し、過去の音楽手法をただ踏襲しただけで独創性が顧みられていない点につよく憤りを表明した。真の芸術とは何かという命題を掲げ、それを追求したのがシューマンである。

シューマンの創作は時期によってその傾向を異にする。1830年代はほぼ全作品がピアノ作品の創作で占められ、1840年は歌曲、1841年は管弦楽、1842年は室内楽が集中的に作曲された。健康を害した後の1845年からライン川に投身自殺未遂を起こす1854年までの創作もまた大きく異なる。それぞれの時期において創作傾向



ドレスデン時代のシューマン夫妻(1847年)

シューマンの評論活動と創作

シューマンは「音楽新報」誌で、幅広く音楽評論を手がけた。彼において評論は創作と密接に結びついていた。シューマンの批評によってその才能が見出された作曲家は多い。ショパンの「モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の「奥様お手をどうぞ」の主題による変奏曲」作品2を、シューマンは「諸君、脱帽したまえ、ここに天才がいる」という言葉で高く評価し、ブラームスを「新しい道」と題する批評で世に知らしめたのはよく知られている。彼らだけではなく、アドルフ・ヘンゼルトやシュテファ・ヘラーもシューマンによってその才能を見出された。

シューマンの音楽評論活動は1830年代を中心とするが、この鋭い批判精神はこの時期の彼の創作とも密接に結びついていた。シューマンはこの時代のさまざまな作品を幅広く

Robert
Alexander
Schumann

がさまざまに変化しているが、一貫しているのは独創性の飽くなき追求であった。その思想は彼の「ダヴィッド同盟」という言葉によく示されている。シューマンの「ダヴィッド同盟」の思想は「謝肉祭」作品9の終曲の「ペリシテ人と闘うダヴィッド同盟の行進」や「ダヴィッド同盟舞曲集」作品6などの作品に表現されている。

「幻想」という理想

ロマン派文学は現実よりも架空の世界を題材としたが、シューマンはとくにE・T・Aホフマンの小説から多くの影響を受けた。ロマン派では「幻想曲」という標題が好んで用いられた。それは定まった形式から解放された自由な感情の表現への要求と結びついている。シューマンも「幻想」と題した作品を数多く手がけた。「幻想小曲集」作品12や「幻想曲」作品17、「幻想曲集」作品111などのピアノ作品のほかに、ヴァイオリンとチェロとピアノのための「幻想小曲集」作品88、クラリネットとピアノのための「幻想小曲集」作品73、ヴァイオリンと管弦楽のための「幻想曲」作品131などの作品を残している。

「幻想小曲集」作品12は当初、各作品に詩を掲げることが構想されていた。「幻想曲」作品17はベートーヴェン記念碑の建立計画と結びついており、作品の冒頭にフリードリヒ・シュレーゲルの詩の一節を記し、第1楽章ではベートーヴェンの歌曲「遙かなる恋人に寄せる」作品98の動機が引用され、この作品でも言葉と音楽との融合が図られている。

ホフマンの小説との結びつきをよく示しているのは「クライスレリアーナ」作品16である。天才的であるが小さく常軌を逸している楽長クライスラーと人間の言葉を解する天才的な猫の物語が緩い関係で結びついたこの小説は、シューマンに強い影響を与えた。ホフマンは小説の主人公クライスラーを題材とした「クライスレリアーナ」という短編集を著わしているが、このタイトルをシューマンは自身の作品に取り入れている。面白いのはこの作品では、バロック時代のシチリアーナやフランス風序曲、フーガなどの表現が用いられている点で、まさに万華鏡を見るかのような作品に仕上がっている。

1810年6月8日

シューマン誕生

1830年

「アベッグ変奏曲」作品1作曲

1832年

「パピヨン」作品2作曲

1834年

「音楽新報」創刊

1835年

クララ・ヴィークとの恋愛が始まる。

1836年

「ピアノ・ソナタ第1番」作品11作曲

1837年

「幻想小曲集」作品12作曲

1838年

「子供の情景」作品15、
「クライスレリアーナ」作品16作曲

1839年

クララとの結婚をめぐりクララの父との法廷闘争

1840年

クララとの結婚。「詩人の恋」作品48など
歌曲を数多く作曲「歌曲の年」

1841年

管弦楽の年。「交響曲第1番」作品38、
「交響曲第4番」作品120作曲

1842年

室内楽の年。3曲の「弦楽四重奏曲」作品41、
「ピアノ四重奏曲」作品47、
「ピアノ五重奏曲」作品44作曲

1845年

精神の不調。
ライプツィヒからドレスデンに転居。
「ピアノ協奏曲」作品54完成

1848年

「子供のアルバム」作品68作曲

1850年

デュッセルドルフに移り、市の音楽監督に就任し、
指揮者として活動を始める。

1854年

「チェロ協奏曲」作品129、
「交響曲第3番『ライン』」作品97作曲

1856年

ライン川への投身自殺未遂。
「天使の主題による変奏曲」作曲
ボンのエンゲニヒの施設で没

知っていた音楽家はいない。とくにピアノの練習曲の批評ではバッハに遡って網羅的にさまざまな作品を体系的に纏めている。シューマンの練習曲への関心はヴァイオリンの鬼才パガニーニの「カプリス」作品1にも及んでおり、シューマンは「カプリス」のなかから12曲を、作品3と作品10という2つの曲集で編曲している。彼の練習曲の思想は「交響的練習曲」作品13に結実している。

1840～45年の創作

シューマンの創作は時期によってその傾向を大きく変化させる。1830年代のピアノ創作の時代の後の1840年から1845年が一つの時代をなす。この時代の創作の特色を以下の点にまとめる。

1 声の表現可能性の追求

シューマンはクララとの結婚が実現した1840年に、憑りつかれたかのようにリートへの創作に没頭する。この年は「歌曲の年」と呼ばれ多くの歌曲集が作曲された。この歌曲の創作で彼が目指したのは詩人の詩の解釈である。「詩人の恋」ではハイネ、「リーダークライス」作品39ではアイヒENDORF、「女の愛と生涯」作品42ではシャミッソーの詩を用いているが、シューマンはこれらの歌曲集の表現を変えている。

2 古典的な世界への眼差し

1841年に管弦楽の創作に着手し、1842年に室内楽の創作に取り掛かるとき、彼はハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの古典的な世界に立ち返っている。1830年代の創作では伝統的な形式からの自由が強く意図されていたのに対して、交響曲や室内楽作品では伝統的な形式に立ち返ってそこに自身の独自の創意を注ぎ込む。

3 バッハの再評価

1844年から45年にかけて精神の疲労のために創作を中断する。その後、一家はライプツィヒからドレスデンに移り住み、彼はバッハの作品研究に従事する。その成果が、すべてカノ

引用の美学

シューマンの創作の特色の一つに「引用」がある。シューマンはピアノ作品だけではなく室内楽作品においても、様々な形で他の作曲家や自身の作品から旋律を引用した。彼ほど広範に引用を行った作曲家は例がなく、もっとも多いのは恋人クララ・ヴィークからの引用である。それはクララとの親密な関係に由来しているだけではなく、作曲家でもあったクララの創意へのオマージュである。引用でもっとも典型的なのは「ピアノ・ソナタ第1番」である。第1楽章の序奏では自身の歌曲「アンナに寄す」が引用され、主部ではクララの「ピアノのための4つの性格的小品」作品5の第4曲「幻想的情景とシューマンの未完の「ファンダンゴ」の旋律が引用されている。

「謝肉祭」の「ドイツ風ワルツ」でもクララの旋律が引用され「ダヴィッド同盟舞曲」の第1曲でもクララの旋律が引用されている。上記の様に「幻想曲」の第1楽章ではベートーヴェンの歌曲が引用されている。「ピアノ四重奏曲」作品47ではプロテスタント・ルター派の讃美歌が織り込まれている。

このような引用はこれまでの創作とは全く異なる効果を生み出す。作品の中に他者の旋律を織り込むことによって、彼はある言語的なメッセージを伝えようとした。もっとも興味深いのは、当時の俗謡「爺様が婆様を娶った時」を「パピヨン」作品12と「謝肉祭」作品9のそれぞれの終曲で引用した例である。芸術音楽の中に突如、大衆的な旋律が登場すること、これを聞いた当時の人々は驚きを覚えたことであろう。この俗謡はペリシテ人（大衆）を表しているのであろう。



クララ・ヴィーク



DÜSSELDORF UM 1850

ライン川の橋(1850年の版画)

ンで作曲された「ベダル・ピアノのための6つのカノン練習曲」作品56や「BACHの名前による6つのフーガ」作品60などの作品である。そしてシューマンは1850年、バッハ協会の創立の発起人に加わり、バッハ再評価に大きく貢献することになる。

1846年からの晩年の活動

この時期の彼の創作のもっとも大きな特色は、子供のための作品の創作である。そのきっかけはクララとの間に生まれた長女マリーののための作品で、それは「子供のアルバム」作品68として完成された。マリーの成長日記ともいべきこの作品は、これまで独創的で革新的な創作に打ち込んできた創作態度とは異なり、子供の感性に即しているという点で画期的である。

シューマンは1850年、指揮者としてデュッセルドルフに移り住む。雄大なライン川やケルンの大聖堂から大きな示唆を得て、「交響曲第3番『ライン』」作品97や「チェロ協奏曲」作品129が作曲される。そして1851年、シューマンはヴァイオリン奏者でゲヴァントハウス管弦楽団のコンサート・マスターのダヴィッドの勧めもあり、ヴァイオリン・ソナタの創作に着手する。しかし、指揮者としての仕事は彼に強い精神的な負荷を与え、ふたたび次第に精神を病んでいくことになる。

シューマンは1852年に「ミサ曲」作品147と「レクイエム」作品148を作曲するが、ルネサンス様式を取り入れたこれらの作品は、それまでの躍動的で、幻想的な彼の創作と打って変わって、静かに黙想するような楽想である。作品番号のある最後の作品「朝の歌」作品133は最後の時期のシューマンの心境を映し出している。